200338-3 群図

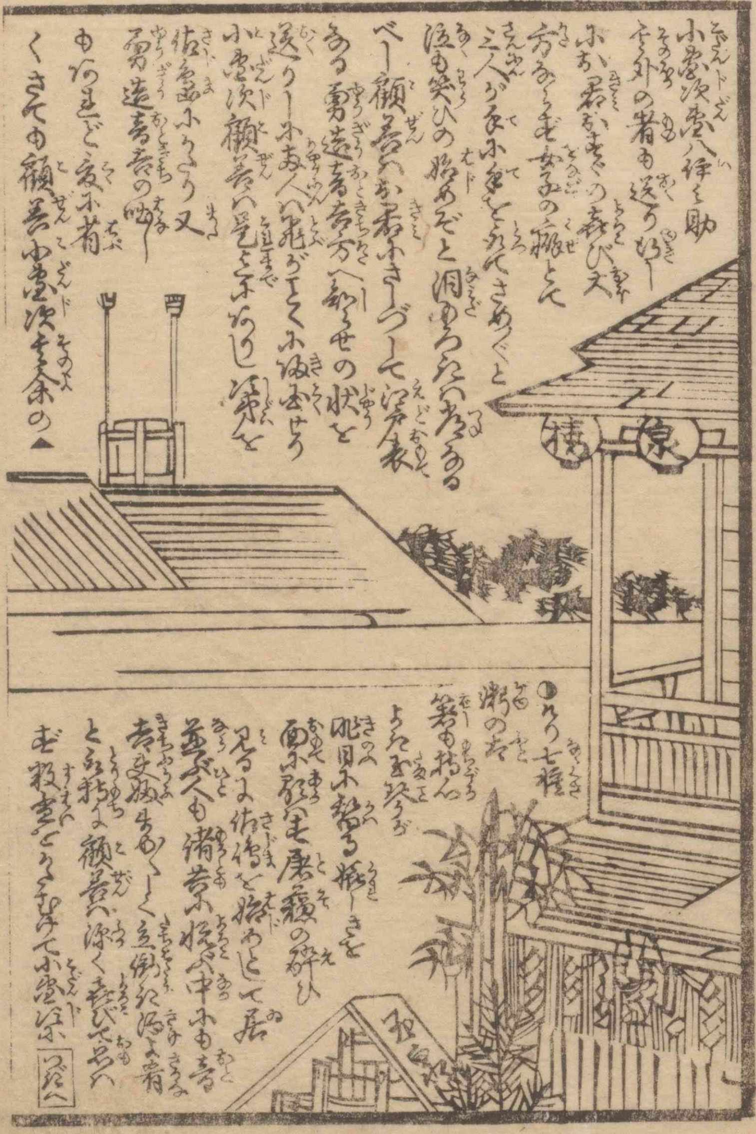
K939
コ04
(9)

中の巻ゟ 相模入道遂らざして高氏をころさんとせしを高時に
悪趣は今又時らず乱舞せしめ人冥を九逝せし
高時は北の土西知ときらしが今眼の
先の此里にあへまるゝを知らでうる
べき浪ならん忽然下りしといへばこのを
べしと怖しのうちに小笠原は驚くと大
方ならず緑こ動て行ゆる玄付率りしが
程なく此種え立返りしに小笠原は知ら
ぬゝと云ふがゝ大悲ゝ実さ親方の内室
へ見せ失礼中せし旅義金にも思る
あつるべし見とどへ申参ねの浮川
の竹不能をさづけ情を書べき
なすを成で哉ぐさた
操をちうぬひへ〔つゞく〕

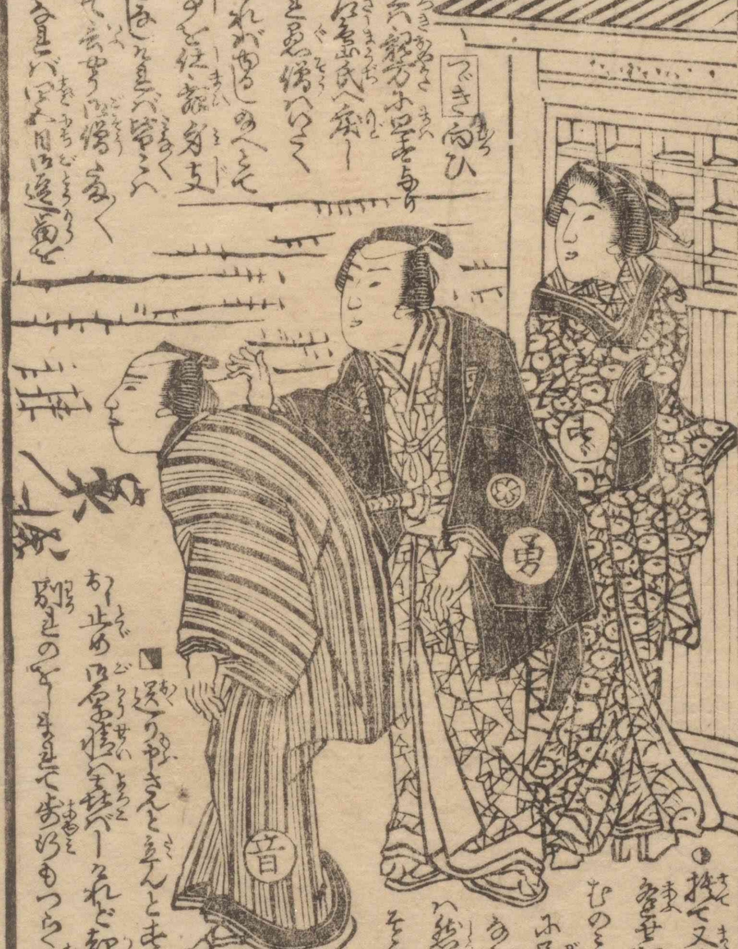
つゞき
松浦の将の石よりもろこしの
君なると感涙継を綴りなれる
主人は三宝へ盃茶花持
来り一同へ一礼して玉琴に
向ひおいらんは喜びなさい
ませ私の為には大切なる母
の命が
将継ヶ岩
彩畜の
萬屋文次郎
さまと云ふ方が
見世の出の
時は八年の助さん
が親分の代とぞ
おいらんを仇交
なさる程どう
ゑゝて居りましたる見物どもが
私も下さる人喚び
おいらんの才
交はりかな
まるとて
金を下さる
されば
その琴を
へみりと
好きる物
萬やかや
せと借人で
それと此所で
さいぜん話おかぬ
ちがふかり

いふ程と為ねし処
おいらんは忠次
親分の身の上さへ
との話しに
私も始めて
安心て
なれど
ならぬ
まいさと聞て
玉琴は驚かれ
萬屋さんとの
話なれど
此方さまへ
旦那さまに
顔善は一同へ
向ひ萬屋に
我よく知るお世
に稀なる仁者
ある彼人の
つぎへ

つゞき
玉
樓
泉
玉
樓
泉


樓
泉
つゞく

此處ハ親方の[illegible]
給ハお[illegible]氏へ参り
女ハ是[illegible]へく
許されば[illegible]の人ぞ
今日の[illegible]親分支
家を[illegible]ハ皆[illegible]
出て[illegible]多く
の[illegible]



●扨て又の
悪事を[illegible]
むのまと云
不首尾[illegible]
[illegible]

近頃やさんと立んとあつと[illegible]

[illegible]

とんと[illegible]と顔[illegible]の[illegible]ません
[illegible]

次へ

国定五下

つゞき 芝居も多く錦を西へかざしろべ
此月のあつきに着物を肥足なし江戸表
へ路つかる途にまる氷深村高
小川左馬之助といへる一年
娘お君の家出をなさしに
近郷近在を尋ねしに新
ぶふ見ねば是も前世の約束
あきらめて下さる娘の
生根十七年は夢あるきと
さまざま男のなかりめよく
此年此方ちるとしが此頃
村の噂を聞くに宝村の
お君と云ふ人ある所かきゝ
茲を遠出せし勇遠ゆゑに遠

▲宝さきへ立る世の
中ハ三月花見に桜も
散り出で入る梅
もう元禄廿三年
の夏中通済
ちの時々猿若町の芝居へ
おとつれし坂蘆に
縁者しるハ浴衣ぞ

去年ろとより旅へ
見物人出入りの
客人や権
来の人
の絶え
あまて
娘の
其の
群るが
ごく日
金山翠
御の賑ひ
手綱
静さ地

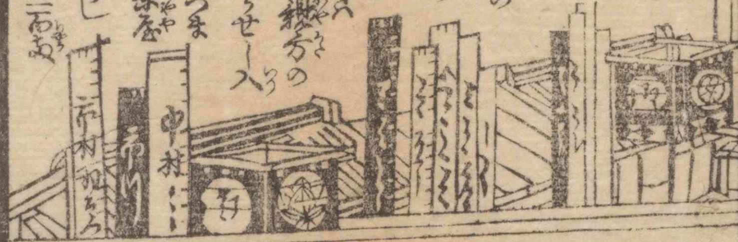
色とさりゞの噂も人ぶりの
手代が紀せし父がねまち
忠次の流れを
皆ゝ教之の
節を出せし
訪見物に参りしお君
其のお話は知らねど
状をそりの其の
お活先生の門義
あつし土地の者の
噂せし其人来て交ひ合ふ
勝手に門義は様権ありと
大方に誤りしが手代ハ此方主人に
咄せべきよきに喜びてそちより外に斗らふべしとそ今まで女▲

吉世の盛りを月の雨り△

艶えし風雅
の姫居内
お妾
が幼子を
艶へて何を
一人ぞち足
ぞんよそるさ
いふも勝手
のうそ添子ハ
あらそれぬ前髪
あり見つけ
とかく生写し
父さんハ忠次とて
人に知られし若衆 次

つゞき

いう みな ふせんかつく ふも続づて ふもやうぬハ 金と稲川の あげたしるも 浄瑠璃 で聞くしづ今ハ ころぶ身の上親方の 裏ゆふちらせし入 めやふやくふつま 早し経小茶屋 中より転ろし 無尽金の二百両

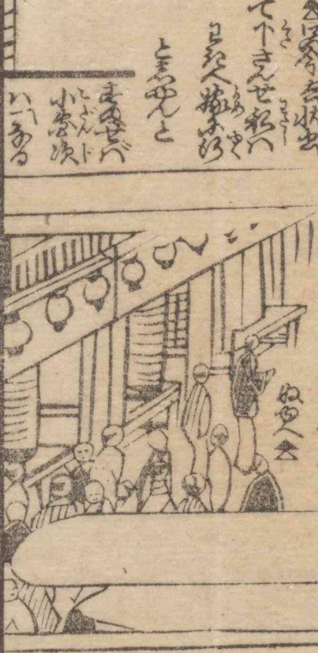


▲ふと定めモシ親方私よ帳も下さんせと云ひも 家ぬ妻のてゞふ小さ次ハふ今都で女房そまへ どうろ君やさう気でも稲ひハ元やらぬうとハ小妻ハ 殿の前三司とちの人気稲ひとハ継ぐを私や かおやと気稲とふやてある人一府ある人一女や中の都り 金持て安やて由渡さふやなるぬ丈ふおかや女稲 ひきふ稲る気稲ひと丈数ふありてあさるべ どの稲あるへめどらん稲も知ると

△関ぞ云状出 て下さんせ私ハ 白玉人様ふ好 と思ひと

まあせべ とんど小金次 ハいある

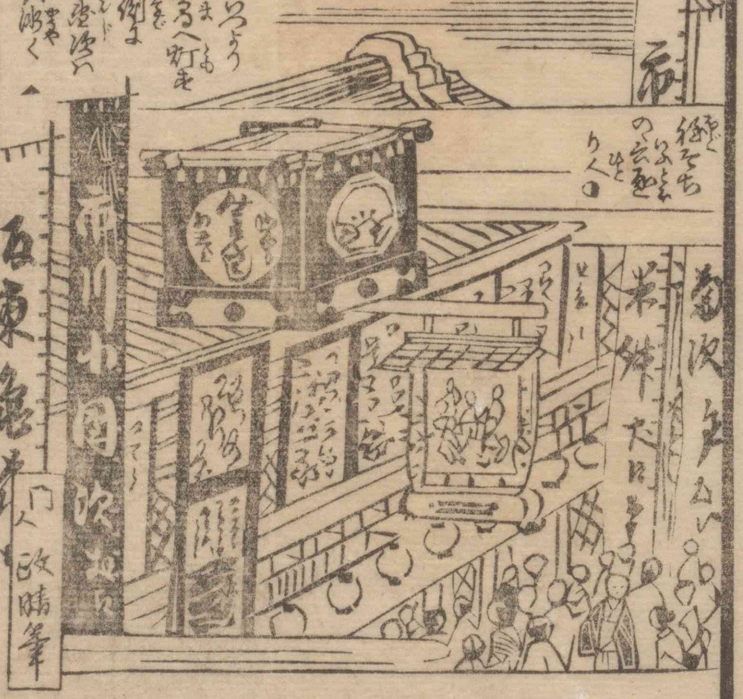
ぬ安人△



●おへよふ里 どの様ろハ 嚢屋経府 ふおとほし 身代

つゞく

ころ 左ひ弄しておわ女稲人を 若しめど二百両ハさして無ても十 あの融通もあるぞ殊ふ七月ハ 今守もて今渡今両人渡してきねへ なる金ぞ上し首とお義の内 稲よ渡しとありしやきうどやくと 我れ関銭ふ宿入て丈の所ろ済とハ 知らぬふ左次ハ八行ふ就弁連て くゞる門の右行る助ぐも海う行うと ふ云ゑ云ろ女房へ立留ふとあふ今日ハ丁うよう おあやへも出と云ろ静ふ名ある行る人町を 以前しの粉より湖して心のうち丈の側よ きぬて言んとして様る稲ふ小金次ハ ふうべぎうらせうと思ねつふ女房ハ泳く ▲



（つゞき）そなたも定めしつらからんと思ふて居る
是とかねんづくにもやらぬ金「その金数に松の
帳「ヲヽ「イヤ金が此の世の中じやと思ふ帳へ下
さんせ「コリヤきらひ大切な松へらちがあかぬ数に
見捨らるゝもこちらの不覚その抱一粋な人
今年六ッの松ら坊の袖
ひの附へどうらふ
あつてさへ抱ると
戯是べて金せんせ
是坊まづて金
けやや金れものが
私や辛ひと云つ程
父へ突まれば御次へ
具さ数「スリヤ是

さこんむ癖を拝へ世帯洞を喰むり数をいそむけてつきものとねべ
きさく胸先へ

拾お役云ても「ふぶ
どうぞ「コナ人で色ひ
新まと五百を父さん
のふと初ふが神ふまう
是べてきづくと居
女房ふがら
おまぞ抱上元数
うち旅め
甚繁洞眼
と嘉そ云ふノウ
是坊まよそさの
暮せ毋さん今日
う肉中ぬ揺ふ
よう数をみそ◆

縁よ手をつた数
うち留ら毋さんどえへ
ろ妻を坊さまり
妻ふ戯と数
男が我のた

ふら　しと親の
縁も今
月漬つと
思へ◎

次へ出ざをと
夜見れ出ご
くと離別の
状を渡して
女房のまま数
出で一室
この婦
くろ婦で
次手か出で
（つゞく）

つゞき 父ハ二と云女房ハ小梅とて此ハ「是で宜しく御頼ぬ」と申せば親方さんお前の様なお内儀さんが付いて居るからハ此上も女房ハ聞き入れぬ者で家の者だと左様申せば御世話に成りまする女房さんから色々と若い衆を御頼み申して置きやす

▲親里さして立帰る △

その後もとの世話する者もなく家の事を案じて居る内に...

二ツ返事で来てくれたとて...

義人後渡

嘉永...

川上鼠遷編輯　梅堂國政画

（つゞき）是ハ先妻のえうかひにて
其の心音を敬ひしあり又後
妻ハ貞実ぐさ聡してよろしく
家にかゝへ夜ふまさ小堂次が
親子の対面臼井とぞげふにて
願善ぐえうけし旅路と云ぶの
一段の言ども二の冊をふへて
ちゝかゝ発兒往り所
舞び語縁をむすふのふん
郷て吉忠勇造ハ氷
沢村小川吉次が家に
とあり是迄と

官許　朝鮮名法　牛肉丸
大包代一下五銭　中包代十銭五厘　小包代六銭二厘五毛

官許　たんせきの薬　天泰丸
一包代六銭二厘五毛

[illegible]

此天泰丸ハ[illegible]

出板御届明治十三年一月十二日

地本錦絵問屋　金松堂

日本橋区松島町二百十七番地
編輯人　大坂府平民　渡辺義方

日本橋区横山町三丁目二番地
出板人　辻岡文助

K939
コ04
(3)
群馬県立図書館
0296343-7
県立
書館